

プロローグ

人の生い立ちは様々ですが、驚きは、何と狼に育てられた子たちがいたということです。

1920年にインドのジャングルの狼の巣穴から、狼の習性が完全に乗り移った人間の女の子二人を保護して、自らが営む孤児院で育てたというイギリス国教会のシング牧師の養育日記が残されているのです。

私はその日記「狼に育てられた子」を基にして、これに関連するC・マクリーンの『ウルフ・チャイルド カマラとアマラの物語』などの本(巻末に紹介)も参考にして、本書本編を書きました。

シング牧師は、愛情の深い妻シング夫人の協力のもとで、他の多数の孤児の養育で多忙ななか、オオカミ少女(ウルフガールズ)に人間性を引き出させる懸命な奮闘をしています。それに応えてオオカミ少女は、果たしてどのくらい人間らしくなっていったのでしょうか。そして、それぞれどんな生涯を送ったのでしょうか。

皆さんはこの物語を読みながらオオカミ少女にいろいろと話かけてみましょう。なかなか答えてくれそうにありませんが、あきらめずに話かけていけば、いつかきっとすばらしい答えを出してくれるはずです。

それは私たちが日常つい忘れがちな、人が人間らしく良く生きるには?という問いに対する答えに違いありません。

この物語は、オオカミ少女達に人間性を引き出させていくものだけに、その問いの答え、つまり人間の生き方の普遍的な真実を浮き彫りにするものです。

私は2002年度まで、高等学校の教師をしていましたが、退職するまでの十数年間、「倫理」等の授業で、延べ何千人もの生徒達にこの物語を朗読してきました。

半世紀をはるかに越えた昔にインドにあったこの物語が示す真実に触れ、多くの生徒達は人生観を変えてしまうほどの感銘を受けてくれました。そして、これから自立していく上での教訓を得てくれました。

年度末には感想文を書いてもらいましたが、その中に、この物語を聞いて自殺せずにすんだという作品がいくつかあったことは、私の朗読活動の最大の収穫でした。

2014年7月

平井 尚一